

# 心理学徒としての倉橋惣三

サトウタツヤ

はじめに

倉橋惣三（以下、惣三と称する）と言えば、幼児教育・保育の大家である。そうに決まっている。

実際、一九一七（大正六）年十一月、東京女子高等師範学校教授・附属幼稚園主事となつてからの活躍はめざましく、とても一言で言い表せない。保育について、実践に裏打ちされた理論をうち立てた、あるいは

理論にもとづく実践をうち立てた、偉大な人物である。

そして、惣三について論じた論文も数多く出版されている。坂元（一九七六）による『倉橋惣三・その人と思想』、森上（一九九三）による『子どもに生きて知る』、倉橋惣三』といった著書が出版されて惣三について知ることができる。

だが、これらの著作では惣三が「心理学徒」であったことにはそれほど注意が払われていない。惣三の前

史として扱われているにすぎない面がある。そこで、本稿では、彼が心理学徒だった時のことを中心にして、惣三の像に迫ってみたいと思う。

まず、惣三が心理学徒だったということはどのようなことか？

それは、惣三が東京帝国大学文科大学（現・東大文学部）哲学科の心理学専修の卒業生だったということである。一九〇六（明治三十九）年のことである。

それがどうしたの？ と聞きたい人もいるだろうが、この年は心理学専修が出来て二年目であった。つまり、惣三は大学で心理学なるものを専門に学んだ人たちの極めて最初の人々のひとりだった。

今でこそ心理学ブームだの何だの言われているが、明治維新後の政府にとって心理学などは泡沫学問の一つであった。心理学のための「お雇い外国人」もいなかったし、心理学のために留学生を派遣することも一八九七（明治三十）年まで無かったのである。

そうした中で一九〇五（明治三十八）年に心理学は、哲学科から独立することができたのである。学生から見ると、哲学の学生として雑多な科目を学ぶ中で、自分なりに「心理学」や「倫理学」などを修めていた状態から、自分は心理学をやっている！ というように専攻を明確にするような制度改革がなされたのである。

保育学専攻を卒業して社会に出る人間全てが、保育学に自分のアイデンティティを持っているわけではない。法学部を卒業して社会に出る人間全てが、法学に自分のアイデンティティを持っているわけではない。そう考えると、心理学専修が出来たからといって大した出来事ではない感じもする。しかし、惣三の場合は名目上の心理学専修ではなかった。むしろ、心理学とじっくりと向き合っていたのである。

### 高校卒業までの倉橋惣三

倉橋惣三は一八八二（明治十五）年十二月二十八

日、静岡市に生まれた。倉橋家は代々徳川家の幕臣（旗本）であり、父政直は徳川宗家を継いだ田安亀之助（徳川家達）に従って静岡に移り住んだのであった。

惣三少年は、父が岡山市の裁判所勤務になったことに伴って岡山で小学校に入学した。しかし、教育熱心な両親は彼を東京の小学校で学ばせることにした（父が岡山に残った）。その後、東京府尋常中学校を経て、第一高等学校に入学した。十八歳の時であった。当時の高校は現在の高校とは少し異なり、「高校最学年十大学一・二年」くらいの教養教育を旨とした学校であった。当時の高等学校卒業生は、希望に応じて全国どこかの帝国大学への入学を約束されていたから、あの意味ではエリートであった。

高校に入った惣三は、他の学生たちとは少し変わっていた。彼は、東京女高師附属幼稚園に行くのを楽しみにしていたのである。そもそも彼は、中学生の時から『児童研究』という雑誌を読んでいたという

くらいであり、単なる子ども好きの域を越えた「子ども好きな少年」であったようだ（『児童研究』のことは後述）。また、この時期に、キリスト教に関心を持ち、特に元一高教師だった内村鑑三の影響を強く受ける。さらに『ペスタロッツチ伝』に出会い、ペスタロッツチに心酔するようになる。

森上（一九九三）は惣三の伝記において、彼の高校時代のプロフィールを以下のようにまとめている。

1 子どもたちに「おにいちゃん」と慕われながらお茶の水幼稚園で遊ぶ青年

2 『児童研究』を講読し、将来牧場の中に幼稚園をつくることを夢見る青年

3 内村鑑三の聖書研究会の会員としてキリスト教の精神を学ぶ青年

4 ペスタロッツチにアコガれ、子どもと共に生き学べる心の持ち主になりたいと望む青年

そして惣三青年は、高校を卒業すると東京帝大に入

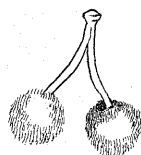
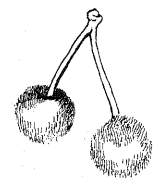
学し、哲学科で学ぶのである。

### 東京帝大における倉橋惣三

東大の哲学科では元良もとら勇次郎に指導を受けた。元良は日本の心理学の父と称される人物で、日本の心理学は彼から始まったと言つても過言ではない。元良はジョンズ・ホプキンス大学に留学し博士号を取得して帰国後、帝国大学（現東京大学）にて心理学担当の教授となったものである。ジョンズ・ホプキンス大学では発達心理学者として名高いホールのもとで心理学を学んでいたこともあって、元良は発達心理学にも造詣が深く、日本児童研究会の会長も務めていた。惣三が中学校時代から読みふけていた『児童研究』を發行

していた会である。また、元良もキリスト者であり、そうした面の影響も惣三に対してあつたかもしれない。

さて、先に、倉橋惣三は心理学専修生としては早い部類に入ると書いた。細かいことを除くと、一九〇五（明治三十八）年の卒業生から、卒論の受験学科、というものが定められ、学生はいくつかの専修を選ぶことができるようになったのである。卒論の受験学科というのは分かりにくい制度だが、要は卒業論文の提出先である。それまでは「哲学科の卒論」という大きな枠だったのが、「心理学専修の卒論」ということになったのである。そして、この制度ができて二年目の学生として倉橋惣三は東京帝大を卒業したのであつた。つ



まり、心理学専修二期生である。この時期、東大以外には心理学専修はなかつたから、惣三は本当の意味での心理学専修二期生であつた。同級

生には野上俊夫（後に京大教授）や大槻快尊（後に東大助手を経て実生院住職）がおり、一つ上の学年には桑田芳蔵（後の東大教授）、一つ下の学年には菅原教造（後の東京女高師教授）、二つ下の学年には上野陽一（戦後に産能大学を創立）などがいた。

惣三が提出した卒論は「児童の言語及び絵画」という題名であることは記録から分かるが、残念ながら現物は残っていない。内容は不明である。指導教官の元良は学生たちについてあまり細かいことは言わない人だったようで、子ども好きの惣三が幼稚園で研究をしていることについても肯定的に受け入れていたのだと思われる。

### 大学卒業後の倉橋惣三

大学を卒業した惣三は大学院に入学した。しかし、一年志願兵として陸軍に入隊する。心理学専修の二期生だった惣三は、心理学を活かして就職することはな

かった。世の中に、心理学というものがよく伝わっていない時期であるから、心理学に期待する人も多くなかったのである。

そこで、心理学専修を卒業したての人々は考えた。心理学の価値を世の中に伝えなくては!!

こうして心理学通俗講話会なる会が産声をあげるようになったのである。ここで通俗とは、中学校・高等学校三年以上の生徒、幼稚園・小学校の教職員、家庭の主婦などを対象にして講演するということを示している。

幹事としてこの会を立ち上げたのが、一九〇六（明治三十九）年卒の大槻快尊と倉橋惣三、翌年卒の菅原教造、翌々年卒の上野陽一であった。指導教官の元良には顧問への就任を快諾してもらい、第一回目の会を催したところ、本人たちもびっくりするような大盛況となった。第一回のプログラムは次のようであった。また、その後に惣三が講演した時のプログラムも一緒

に示しておく。

倉橋惣三 小言の研究

第一回 一九〇九（明治四十二）年五月

第二十回 一九一二（明治四十五）年一月

菅原教造 着物の色合の話

倉橋惣三 子供の隠歴性に就て

大槻快尊 返事の速い人遅い人

菅原教造 日本画に現れたる松と鶴

倉橋惣三 子供の嘘言

関根正直 縁起の話

第八回 一九一〇（明治四十三）年二月

倉橋惣三 子供の臆病

いわゆる心理学とは異なる話題も含まれているが、こうした内容の講演会の中心として倉橋惣三は活躍していたし、それは世間にも認められていた。六〇〇人が来場したこともあったという。

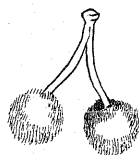
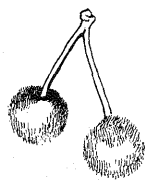
富士川游 人相と骨相

では、惣三が行った講演の内容はどのようなものだったのだろうか。講演の内容は『心理学通俗講話』

第十二回 一九一〇（明治四十三）年十月

菅原教造 運動の美

という雑誌に掲載されている。講演



が好評だったため、講演を聞けなかった人のために講演内容を出版することになったのである。

第一回「子供の嘘言」において惣三は、子どもがウソをつかない無垢な存在だと信じるが故に子どもがウソをつくともやみに怒ってしまうことの無いように、と注意を促している。子どもと大人のウソではその意味が違うのであり、子どものウソについて研究することが重要なのだと惣三は主張する。そして、ウソを十三の類型に分けている。

遊戯におけるウソ　みえ坊のウソ

うそと知らずに言うウソ　いたづらのウソ

つい言ってしまうウソ　言い抜けのウソ

意地づくのウソ　自分のためにたくらむウソ

人を喜ばすためのウソ　癖のウソ

味方には真実、敵には計略のウソ　やまいのウソ

俠気のウソ

こうしたウソについて惣三は細かく説明している

(ここでは割愛)。そして、ウソの性質が分かっ  
てまえば、それぞれの教育法・矯正法は自然に分か  
つてくるとした上で、惣三はさらに注意を促す。

子どものウソには大人が教えるものが多い、  
というのである。

「ウソも方便主義の濫用」「ウソの教唆」「大人の猜疑  
的態度」こうしたことが子どもたちにウソを教えてい  
ると惣三は警告する。

最初のもものは、大人が子どもと目先の約束をして  
(後でお菓子買ってあげるからおとなしくしなさい)  
においてそれを破ること、次のものは、子どもが何か悪  
いこと(皿を割るとか)したときに、周りにいる大人  
が「自然に落っこちたことにおこう」などという  
こと、についてそれぞれの非を説くものであり、最後  
のものは、一度子どもがウソをつく、「またウソ  
言ってるだろう」のような態度で接することがかえっ  
て子どもをウソに追い込むということについて注意を

促しているのである。

さらにこの講演の最後で惣三はこう言って嘆く。

「大人のくせにウソをついて、殆どウソでまらめて、ウソで固めぬいた近頃の社会で、一人の子どもをウソつきで無い者に育てようとするのは中々容易ではありません」

いつの時代も似たようなものなのだなあと思うのは私だけではないだろう。

おわりに

惣三が行った講演の内容は、他にも活字になってい  
る。それらを読むと、自分が親として子どもとかか  
わっている時の反省なども盛り込まれている。惣三は  
常に、子どもの立場にたって、子どもの視線でものご  
とを捉えていたと思われるのである。心理学通俗講話  
会を立ち上げて活躍した彼であるが、一九一七（大正  
六）年に東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大

学）教授となると、やはり心理学とは距離を置くよう  
になっていく。しかし、子どもへの興味を大学でも成  
就しえたのは心理学という学問であつたし、心理学を  
伝えようとした心理学通俗講話会では彼は常に子ども  
の発達の話をしていたのである。色々な意味で、心理  
学は惣三にとってその後の活躍のためのエネルギーを  
蓄えるものだったと言えるのではないだろうか。

（立命館大学）

#### 参考文献

『心理学通俗講話』 第一輯 第三輯 第五輯  
『通史 日本の心理学』 北大路書房